秋田雨雀日記

秋田雨雀日記　第2巻

1965年11月30日　　第1刷発行

定価　1,800円

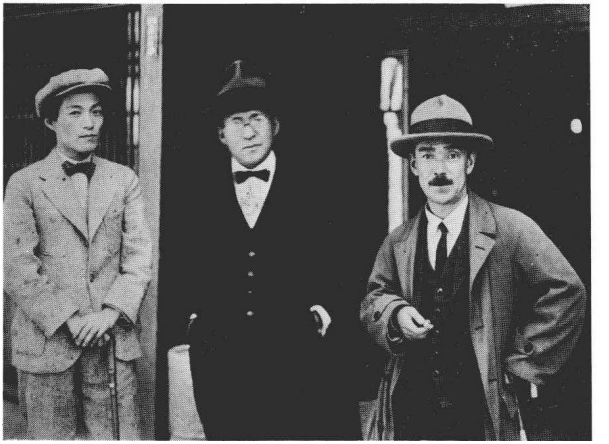
編　集　尾崎宏次
発行者　西谷能雄

発行所　株式会社　未来社
東京都文京区小石川3の7
振替東京87385　電話（812）0454

本文製版/山洋印刷　本文印刷/萩原印刷
装本印刷・口絵/形成社　製本/今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえします。　©秋田いく

秋田雨雀（1949年）

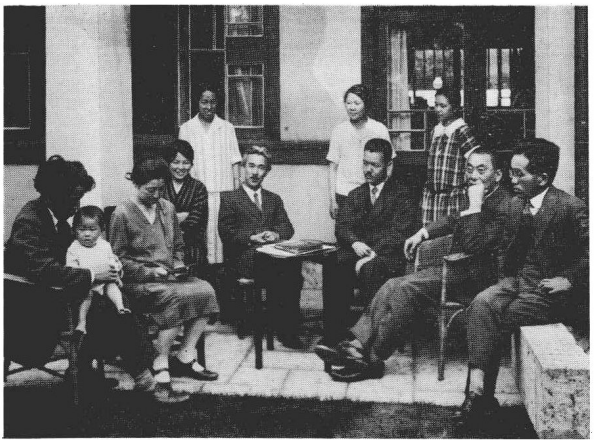


改造社の講演旅行のとき撮影したもの。右から雨雀、吉田絃二郎、片岡鉄兵（1927年、新潟で）

レニングラード「ソフキノ」映画撮影所でポズニヤーク氏と。左端は鳴海完造（1927年）

滞ソ中「ボクス」で。左からノワミルスキイ、美術批評家アルキン、小山内薫、雨雀、米川正夫、鳴海完造（1927年）

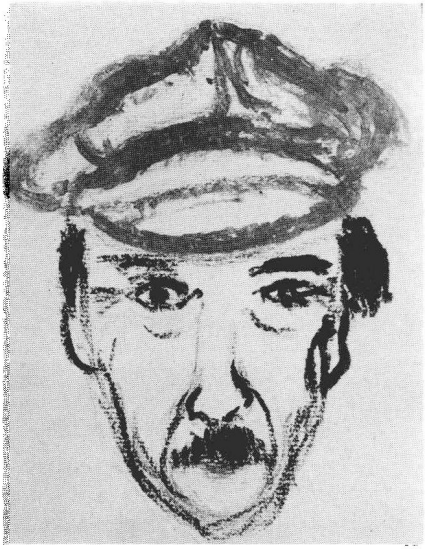
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



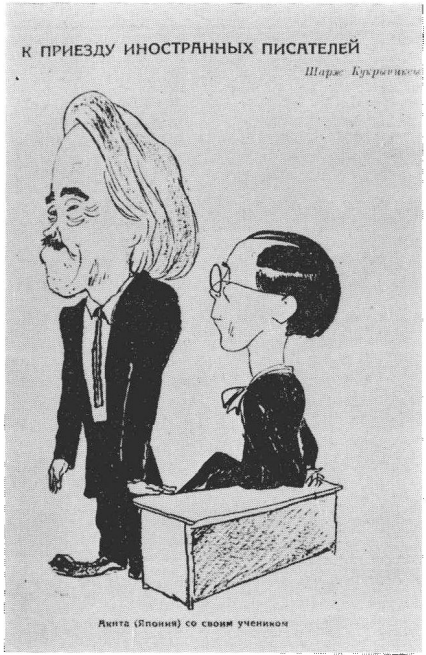
「婦人の友」談話会にて　中央が雨雀（1928年）

前進座の招待会。前列左から長十郎、国太郎、一おいて小林一三、平尾賛平、中内蝶二、渥美清太郎、雨雀（1933年）

渡辺順三氏出版記念会。左から窪川鶴次郎、一人おいて藤森成吉、渡辺順三、雨雀、徳永直、森山啓（1934年6月20日）



自画像（1926年写）



ソ連文学雑誌「文学哨舎」（1927年10月号）に掲載された漫画。漫画家ククルィニクスィ筆。「秋田とその生徒」と題された。生徒は鳴海完造。

短冊
（山田清吉氏提供）

雑司ケ谷時代、自宅での雨雀と千代子

刊行のことば

全四巻が完結すると、四百字詰めの原稿用紙で六千枚をこす分量になると思うが、その出版を未来社がひきうけてくれたことは、私にとっては特にうれしい。先生が歿してからもうすぐ三年になるが、そのあいだ、私はじぶんの部屋にあずかっている四十七冊の日記を毎日ながめつづけていた。雨雀日記なら出版してもいいという話が二、三あったけれども、六千枚ぐらいだというと立ち消えになった。その条件が容れられて、いまようやく第一巻がだせたのであるが、さらにつづけて残りの日記を整理して、死の四カ月前まで書きつづけられた約半世紀の記録を本にしあげる責任を、いま感じている。

雨雀日記の編集をするようになったのは、私の運命だろうと思っている。というのは、兄の義一（筆名・上田進）が雨雀の娘千代子と結婚したので、秋田家とは親戚になったのであるが、兄たち夫婦ははやく世を去ってしまったので、先生のまわりには、そういう親戚関係のなかにだれもものを書くような人がいなくなっていたからである。

もっとも、私がこれだけの分量を書きつづってきた日記について先生から直接話をきいたのは、八、九年前のことだった。板橋の家へ移る直前ぐらいだったかと思うが、ある日訪ねていくと、「私の財産はこれだけです……」といって、ぼろぼろになった古日記をみせられた。私はそのとき、どうしてこんなに根気よくつけられたのですか、ときいた。遅筆家であったことは知っていたので、この克明さはちょっと不思議であった。そのとききいた話では、芝居の世界へはいってからはわずらわしい人間関係にとらわれて、とてもものを書く気持になれなくなっていったこと、

しかし、自分はもともと詩人として出発したので、その情熱は失っていなかったから、それを結局、日記を書くということのなかにそそいだ、というようなことを話してくれた。

雨雀が世を去ったのは一九六二年（昭和三十七年）五月十二日であるが、その年の一月二十一日で日記は終っている。ずっと寝たままでいたが、死の四カ月まえに、もうペンを手にするだけの肉体的な力がなくなっていたのであろう。

私は、先生が亡くなる二週間まえの四月二十九日に、急に板橋の家へよばれた。部屋へ入るなり、きょう、どうしてもこの日記を全部あなたの家へ持っていって下さい、保管をたのみます、と言われた。病状が絶望的であることを医者から耳うちされていたから、私はひどく予感のようなものを感じた。いつでもいいじゃありませんか、とにかく日記の保管は私が引きうけます、というと、珍しく少しふきげんになって、もしもここが火事になったらどうしますか、私はこのひと（と夫人を指して）を背負ってにげるのが精いっぱいです、どうしてこれだけの日記を完全に持ちだせますか、と言った。

私はすぐ承知した。夫人に眼で合図をして、四十七冊の日記をふろしきに包み、その日のうちに自動車で家へはこんだ。それからの二週間ばかりを、私はいいようのない不安のうちにすごした。死の予感というようないいかたをしてもいいものかどうか、わからない。が、そのときとにかくそういうことで日記をあずかった。

雨雀日記は大正四年二月からはじまって、ほとんど全部が当用日記につけられている。その例外は、一九四四年（昭和十九年）と四五年（昭和二十年）のぶんで、前者は小さな手帳ふうの日記だが、後者は原稿用紙やいろんな用紙をとじこんだものにつけられていて、戦争の末期がしのばれた。非常に惜しいのは一九三九年（昭和十四年）の日記がないのと、その翌年のぶんが秋ごろまで空白であることだが、一九四〇年の日記には、その空白の部分は日記を警

視庁に没収されたと書いてあるから、一九三九年のぶんも全然戻ってこなかったようである。これは一九四〇年八月十九日に新劇が弾圧されて、新協劇団と新築地劇団がつぶされた、あの事件のときに持っていかれてしまったものにちがいない。鳴海完造氏は、雨雀が生前にそういっていたと教えてくれた。

日記の整理は、一応、四巻で六千余枚という目標をつくって、はじめた。そのため、ある程度のカットは編集上やむをえなかったが、できる限り、私事にわたることで重複したようなところを省略した程度である。もとの日記は、未亡人とも相談の上でこの刊行が終ったら近代文学館におくることにした。それをみていただくとわかるが、カットしたところは赤い×印を日付の下につけてある。筆写するときの必要もかんがえて、そういうふうにした。

生前に「雨雀自伝」（昭和二十八年刊）をだすとき、先生はこれらの日記をもとにして原稿を書いた。そこで、「雨雀日記」にこまかい註をくわえることは差しひかえて、それよりも各頁の欄外にかきこまれているような文字をできるかぎり収録することのほうに編集の重点をおいた。エスペランティストであったので、文中にエスペラントのでてくることも多く、全体にわたって、門弟であった佐々木孝丸氏にも目をとおしてもらって、註を最少限にしていれた。また第二巻に収められる一九二七年から二八年にかけての滞ソ日記は全文を一頁のカットもなくいれて、鳴海完造氏に註のアドヴァイスをおねがいした。多忙な両氏の御助力をえたことについては、編集者としてとくに感謝の意をしるしておきたい。

なお、

伊東三郎、神近市子、菅忠道、佐々木孝丸、佐藤誠也、薄田研二、千田是也、滝沢修、塚原健二郎、中野重治、浜村米蔵、原彪、久板栄二郎、鳴海完造、藤森成吉、水谷八重子、村山知義、山本安英、山室静

の方々に「秋田雨雀日記」四巻の推薦者になっていただいたので、刊行の機をはやめることができた。雨雀日記の足どりは、エスペラント、児童文学、思想問題、新劇などの多方面にわたっているので、生前の雨雀を知るかたがたの御支援をえられたことはありがたかった。

未亡人いくさんは近藤晴彦氏のお世話で一九六二年二月二十二日に病臥中の雨雀と結婚した。未亡人にかわってひとこと記しておくが、雨雀の遺骨は豊島区雑司ケ谷の本納寺におさめられた。一九六四年五月十二日に、本納寺住職兜木正亨さんの書で「雨雀の墓」と自然石にきざんだ小さな墓碑を同寺内につくった。郷里の黒石市二カ所にも分骨された。ひとつは黒森山の歌碑のなかに、ひとつは同市山形町法眼寺にある秋田家代々の墓におさめられた。

とにかく雨雀没後三年目になろうというところで、日記の第一巻（大正四年から大正十五年まで）がでる運びになって、ほっとした気持とうれしい気持とがいりまじっているような感じである。「いますぐ君の家へ持っていってください」と言われたあの三年前の日のことを想いだしながら、私はこの刊行を地下の雨雀に報告できるよろこびをもった。

仮名ずかいは現代仮名ずかいになおした。先生は、万一出版するときにはそうしていいと言って、仮名ずかい、漢字制限などについては明治時代のデモクラットのほうが進歩的だった、と笑っていた。

やっと四分の一の仕事を終えたばかりである。まだ、あと三十六年間の日記が本棚のなかに待っている。

一九六五年三月　編集者としてしるす

尾崎宏次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

刊行のことば……一
一九二七（昭和二）年……九
一九二八（昭和三）年（文学演劇研究行脚）……五九
一九二九（昭和四）年……一三九
一九三〇（昭和五）年……一七六
一九三一（昭和六）年……二三一
一九三二（昭和七）年……二九九
一九三三（昭和八）年……三三六
一九三四（昭和九）年……三七五
註……四二七

凡例

一、本書は、一九一五（大正四）年から一九六二（昭和三七）年に至る四七年間の秋田雨雀の日記を、若干部分の割愛をほどこしたのみで全四巻に年代を追って収録したものである。

一、収録にあたっては、故人の意志を尊重してすべてを現代仮名遣いにあらため読者の便をはかった。明らかに誤記と思われるものの訂正のほかはすべて原文に従い、無用の補筆・削除はおこなっていない。

一、日記中の長文のロシア語、エスペラント語の記録は、必要と思われる以外はこれを除き、欄外の心覚え、メモ等は、（……）内に入れてほとんどを収録してある。

一、日付の下の★印は、その日付中の記録に編者の註があることを示し、それらは巻末に一括整理してある。但し註は、煩雑さを避け、必要最少限にとどめてある。

一、本書刊行の趣旨については、巻頭の「刊行のことば」を参照されたい。尚、最終巻に「秋田雨雀年譜」を付し、その生涯・著作活動等をあとづけたい。

一九六五年三月

編者　尾崎宏次

秋田雨雀日記　第二巻

一九二七（昭和二）年～一九三四（昭和九）年

一九二七（昭和二）年

一月一日

諒闇の正月。晴。近来にない暖い元日だ。夜から町を歩きつづけて、暁方赤鬼により、ワセダの支那そばやで菊地、蔦ちゃん、清ちゃんなぞと会食して家に帰った。室の整理もほぼできた。五時すぎに床についた。まだ朝の光がこない。ロシア語を少しつづけてみた。ロシア語は八月ごろまでに正確にやろう。

夜、帝劇の築地小劇場をみた。お互いに関係あるできごとが三つの道を通ってお互いに交錯しない形のままで芝居をすすめていく。質ものの中にあった手紙によって人生の迷路の中へ入りこんでいく質屋の主人とセムシの娘。山師で遊冶郎の青年ノイマンと興行師の仲間、映画女優。ノイマンに捨てられて新しい結婚生活に入るルイゼ。作者の態度はニヒリスティックだ。document の芸術とみるべきか？

（ロシア語をつづけろ。戯曲の着想。カイゼルの「平行」を見た。）

一月六日

晴。暖い日がつづく。千代子は倉橋家へ。午後三時から歌舞伎座の春狂言（国民合評会）に招かれていった。しばらくめで全く異った空気の中へ入ったような気がする。「楼門五山の桐」はただ夢幻的なもの。「阿蘭陀船」は流涕悲劇としてはいいもの、しかし浅い。「黄門記」は性格描写の失敗。「助六」のイリュージョンはだんだん失われていく。

（歌舞伎合評見物。）

一月九日

昨日にくらべて驚くべき相異。四十度ほどの寒さ。また冬が帰ってきた。千代子は軽い風邪。

夜、梶、小河原二君がエスペラント文学の翻訳のことでやってこられた。菊池、金子、志賀、武者小路、林、葉山の諸君の叢書をつくることに決定。菊池君の「父帰る」"La patro revenas" ができた。（第一篇、志賀君の「范の犯罪」）

一月十一日

雨。一日雨。夜、雨晴れて新月が出てきた。千代子はまた少し風邪をひいてるので勉強を休んでいる。生活にたいして自信をもて。周囲にくだらなく動かされるな。自分に生きることができずに社会的に生きられない。夜、珍紅亭に「黄門記」と「阿蘭陀船」の合評。高安、池田、本間、大関、岡田、植木の諸君が集った。まつばら喫茶店に寄った。

（「早文」に短い感想を書け。合評会。）

一月十二日

晴。千代子に哲学史とシェウィルの近代史の「フランス革命史」を読ませる。ギリシア哲学に対して興味をもたせるようにしよう。フランス革命に関する明瞭な観念を。

散歩。佐藤君のところに寄った。前衛座の演劇学校のことで行ったそうだ。夜、紅屋に寄る。

一月十三日

晴。暖い。五十五、六度。千代子に革命史と哲学史をつづけている。少しつづけて双方のまとまった知識をあたえるようにすること。

夜、菊泉で藤森君、花柳君たちと会った。花柳はプロスティチュートのような態度をとっているので、ちょっと不快な感じがした。この女性はちょっと救われがたい女だ。

一月十六日

晴。風が烈しい。ロシア語をつづけている。午後入浴。水町京子女史が清水君といっしょに来た。書をたのんでいった。「ロシアへ帰ったピリニャーク」を八枚ほど執筆。夜、朝日へとどけた。

（「ロシアへ帰ったピリニャーク氏」を「朝日」に書いた。）

一月十八日

小雨。千代子の勉強。フランス革命史が比較的よく読めるようになった。ロシア通信に「ワシリー・エロシェンコ」を執筆した。エロシェンコの思い出を断片的にかいてみた。夜、牛込の方へ出た。紅屋に寄り、早稲田へ出てかえった。羽衣館のそばの喫茶店に寄った。

（ロシア通信に「ワシリー・エロシェンコのこと」を十枚ほど）

一月二十二日

晴。千代子は木村家へいった。夜、読売の「野獣群」の会へいく。ダダ的な要素とコンムニスト的な要素とごっちゃになった不純なものだった。

（今日から尾崎君がロシア語のルーデンをはじめてくれる。）

一月二十三日

寒い。非常な寒さだ。夜は室内で零度だ。夜、いい月がでていた。北海道の空を思いだした。散歩、佐藤君を訪うた。少し足を負傷していた。

夜、ロシア語の「ルーデン」を筆記して復習した。むずかしい。文字を知らないので骨が折れる。やったものの半分だけを完全に習ってみた。この分ならやれそうだ。松原を訪い、甘栗をやった。暉岡君たちとプロレタリアの芸術を論じた。ワセダに寄った。

一月二十五日

晴。寒い。千代子の勉強。エスペラントの訳読をやった。サートの文章、"Sennacieca edukado de infanaro" を読んだ。哲学はプラトオのイデア論について。

午後三時から本郷座へいく。文芸春秋社の招待。徳田秋声と山田

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com